

京都府アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会

連絡先 〒606-0033 京都市左京区岩倉南四ノ坪町4-4 辻崎忠由方 電話/FAX 075-722-7888
tjsktdys.willbe.w11@gmail.com 年会費(6,600円)は郵便振替 00970-4-223429 京都府 AALA 連帯委員会へ
ホームページ新版 <http://kyoto-aala.com/> (旧版へのリンクあります)

公開講演会開催!!

～朝鮮半島情勢と今後の展望～

①

去る2月16日(土)、立命館大学国際関係学部特任教授 文 京洙(ムン ギョンス)氏をお迎えし、「朝鮮半島情勢と今後の展望」と題して講演会を開催、30人の参加でした。以下はその要旨です。

冒頭、講師ご自身から話された自己紹介は次の通りです。

先程紹介がありましたが、私は東京の三河島(ご年配の方は「三河島事件」をご記憶かも知れませんが)という済州島出身の在日朝鮮人が居住する地域で生まれました。3年程前からアジア・アフリカ研究所の代表理事をさせて頂いています。大学から大学院にかけてアジア・アフリカ研究所で研究活動をしてきた先生のご指導を受けていましたが、その先生は AALA 連帯委員会でかなり活動されていて、私も連帯委員会の皆さんと交流がありました。赴任先の立命館も AALA 連帯委員会に関係されている方、教職員が多いようです。また2ヵ月程前、福井 AALA にもお招き頂いてお話をして来ました。今日はこのようにお招き頂いて、大学院時代からのお付き合いですので非常に感慨深い思いでここに立っています。宜しくお願いします。

さて、今日は日韓関係の最近の状況についても少しお話が出来れば、と思います。最近の日本のように韓国に対する逆風が強い、なかなか経験したことがないような酷い状況になっています。本田運営委員長も触れられましたが、要するに安倍首相の頭の中には憲法改悪しかないのではないかという気がします。ある意味ではそのとばかりで、韓国がターゲットになっている面もあります。そういう意味では朝鮮半島もしくは日韓関係、日中関係について、改めて冷静に振り返って考えてみないといけない時期がまさに今じゃないでしょうか。

今日お話しする内容は主として二つの事です。最近の朝鮮半島情勢、昨年3回の南北首脳会談が行われています。4月、5月、それから9月、特に9月の首脳会談は非常に画期的な意義のある朝鮮半島の歴史と未来を考える上で非常に大きな意味を持った会談だったと思います。それは第二次世界大戦後の朝鮮半島の分断体制を克服していく大きな一歩が昨年一年を通じて記されたということです。戦後70年以上経って、漸く朝鮮半島の分断若しくは葛藤が克服されつつある。これは言うまでもなく朝鮮半島だけではなく、日本も含む北東アジア情勢に大きな変化をもたらすような情勢展開であったと考えています。この話をする時は大雑把ですが、そもそも分断体制とは何だったのか、少し振り返った上でこの分断

の克服の昨年の経緯、見通しについてお話しします。



それから今日のテーマ(「朝鮮半島情勢と今後の展望」)を一言でいうと、「朝鮮半島の和解と平和」に向けて今、大きく動き出していますが、その和解と平和への源泉というか、源になっているのが韓国の民主化運動だと言えます。皆さんも記憶に新しいと思いますが、16年の暮れから17年の初めにかけて韓国では「ロウソク革命」という言い方をしていますが、延べ1600万人～1700万人の人が街頭に進出して、ロウソクに火を灯すという大きな出来事がありました。今の文 在寅(ムン ジェイン)政権は民衆の民主主義、人権、平和等を求めた闘いの延長線上に立つ政権であり、民衆の願いや動きを背景にして、何とか和解の動きをこの間、進めてきている。そのことが東アジアに大きな変化をもたらしている状況だと思います。ただ、2016～17年にかけていわゆる「ロウソクデモ」・「ロウソク革命」という言葉に強調されるような動きは、その時偶然に起こった動きではなくて、ある意味では分断体制を克服するための民主化運動の積み重ねの中で、運動そのものが色んな層、色んな種類の運動が多様に混在した形で、あれだけ大きなエネルギーを発揮しているということです。やはり韓国の民主化へのエネルギーというものを理解するためにも少し歴史を溯って、簡単におさらいというつもりで、とりわけ昨年一年間の朝鮮半島情勢の展開についてお話しします。

日本の植民地支配が終わり、第二次世界大戦中のカイロ宣言或いはヤルタでの会談等、連合諸国の首脳は朝鮮半島の独立というものを約束していた。しかし、米ソの進出によって朝鮮半島は分断されました。米ソによって分断されたということで、念頭に置いて頂きたいことはソ連の参戦ということです。ソ連の参戦は1945年8月8日です。8月6日に広島に原爆が投下され、8月9日に長崎にも投下されましたが、その間に参戦がありました。歴史にもしもということの意味はないのですが、例えば7月末のポツダム宣言を受諾していれば、日本は7月末で敗北しているわけです。よって広島、長崎への原爆投下もなかった訳で、朝鮮半島にとっては決定的な意味を持っていますが、ソ連の参戦もありませんでした。もっと遡ると、45年2月にヤルタ会談があり、ドイツ、日本の敗北が動かし難い情勢の中で、戦後世界のいわば「縄張り」を確定するための会談が行われています。その時、朝鮮半島については2つの重要なことが決められています。それが、朝鮮半島の戦後を決定づけました。一つは信託統治で、国際的な管理の下に置く。もう一つはドイツの敗北後、3ヵ月以内にソ連が対日戦に参戦するということです。ソ連と日本は第二次世界大戦中、殆どの時期を通じて、日ソ中立(不可侵)条約(1941年締結)の下に置かれていました。その期限が1946年ですから、中立条約が有効であれば、ソ連は東アジアの対日戦に参戦することは有りませんでした。ヤルタ会談の約束に基づいて丁度、3ヵ月後に対日戦に参戦しています。華族の近衛文麿元

首相はヤルタ会談が行われているとき、天皇に上奏(日本の敗北は明らかで、このまま戦争を続ければ敗北して、共産主義の国になってしまう。つまり、国体が崩壊するので、和平にもって行こうと進言)したが、天皇はもう一度どこかで勝利して、和平に持ち込みたいという、当時軍部、指導部も一般的に考えていた「一撃講和論」で応えた。即ち、一撃を与えて、その勢いで講和を有利に持っていき、最低限天皇制、国体を守ろうとした。その意志が日本の敗戦をズルズルと引き延ばし、東京を始め、大都市への空襲、沖縄戦から広島、長崎の犠牲など、300万人以上の人々が犠牲になっています。その多くの犠牲が1945年です。敗戦を引き延ばした結果として、起こるべくして起こっている。又引き延ばしの最大の理由が天皇制だった。そして引き延ばされて最もとぼちちりを受けたのが、朝鮮半島です。良かれあしかれ、もし日本が7月末までに敗北していると朝鮮半島は米国の影響圏下に入っていたと思います。資本主義の中で、日本と同じように社会主義・共産主義勢力と自由主義勢力が争うような多面的な政治構造になっていくという形が想定されるが、何れにしろ分断はありませんでした。戦後の分断を考えたときに、ソ連の参戦が決定的で、その参戦をもたらした最大の背景が日本の終戦の決断が出来なかったこと、出来なかったことの背景が天皇制の維持であったことは念頭に置いて頂きたい。

そういう形で米ソに分断されました。当初は便宜的なものと説明され、朝鮮半島に展開していた日本軍の武装解除が目的で、北側についてはソ連が、南側については米国が担当とされ、半島の統一構想、戦後の国家構想は信託統治だった。イメージとしては非常に悪く、漸く日本の植民地支配から解放されたのに、また大国の影響下に置かれるのか、と半島の人たちから反発が多かった。朝鮮人自身の臨時民主政府を作る。但し、5年に限って米・英・中・ソの4大国の後見の下に置く。それが信託統治の内容です。恐らく、朝鮮半島が統一する唯一の可能性は戦後の国際冷戦から考えると、この信託統治しかなかったでしょう。ところが、国内で信託統治を巡る左右両派の激突、米ソの国際冷戦が45、46、47年と時をかさねる毎にヨーロッパ発で深刻になって来て、信託統治構想が流れてしまいます。それを受けて米国は朝鮮問題を国連に持ち込み、国連の監視下で、朝鮮半島全体で選挙を行って、国会を作り、憲法を作って、新しい国家を作っていく構想を打ち出します。当時の国連は米国一辺倒ですから、北側がこれを受け入れる訳がありません。北朝鮮とソ連が拒否をして、国連監視の下での選挙は南朝鮮単独で行なわれた。それが1948年5月10日(韓国では5.10単独選挙という)、その選挙によって生まれたのが、大韓民国(その年の8月)、北朝鮮はこれに対抗して、9月に朝鮮民主主義人民共和国を建国しました。北側・共和国、南側・民国、英語ではどちらも「Republic(共和国)」、共和国の体制の下で、二つの国家が生まれました。この両国が1950～53年にかけて「朝鮮戦争」を戦うことになります。その戦線は半島を行ったり来たり、ローラー状に行われ、非常に悲惨な戦争でした。何人死んだかもわかりません。統計上、戦争直前の人口統計と戦争直後の人口統計で人口がどれだけ損失しているか、という統計しかありませんが、最低でも300万人以上の人々が亡くなっている、と言われていています。3年に及ぶ戦いでしたが、いわば痛み分けで、53年7月に「停戦協定」が締結されました。戦争が終わって70年近く経ちますが、未だに朝鮮半島は戦争状態にあるということです。今、南北和解、米朝和解というのは、この朝鮮戦争を通じて確立した、固定化した分断体制を条約上のことと言えば、「停戦協定」を「平和協定」に変えるということは、解放から8年の間に固定化した分断を如何に克服するのか?今、克服への見通しが漸くついている、という歴史的な意味を持っていると言えます。

この朝鮮戦争の過程で、韓国という国が生まれます。朝鮮戦争を戦ったこともあって、徹底的な反共、草の根的反共国家です。一人一人が共産主義に敵意を持つような国に生まれ変わっていきます。その反共ということをお口にして、植民地権力、植民地時代に甘い汁を吸っていた警察や官僚が復活して政権基盤になる、李承晩(イ・スンマン)が初代大統領になりますが、一言でいうと大韓民国というのは韓国内なる植民地を清算出来ないまま成立した植民地権力と言ってよいと思います。一方の日本についてもGHQの下で、非軍事化、民主化の措置が進められますが、逆コースで自由主義圏の最前線に位置するような国になっていく。植民地主義の清算が殆どなされないまま、平和国家として新憲法の下で生まれ変わるわけですが、侵略戦争や植民地支配についての加害者責任について言えば、殆ど国民的に共有されないまま、日本の戦後は出発したと言えます。勿論、戦後の平和主義、民主主義は日本国民の中に強力に浸透していきます。そのことが1960年の安保闘争という形で爆発しているわけで、韓国の「ロウソクデモ」も凄いです。60年の安保闘争も相当凄く、400万人近い人が街頭に出ました。戦後の第二次世界大戦という悲惨な戦争を経て、戦後の平和主義、民主主義の定着、ある意味では新憲法が国民

の中に血や肉として定着するような状況を生んでいるわけですが、只、侵略戦争、植民地支配の加害者責任は、安保闘争時でも相当に弱かったと思います。植民地支配の反省どころか、この時期は韓国にイ・スンマン政権が誕生したこともあり、今も相当日本社会の韓国に対する認識が悪くなっていますが、近代史上、日本の韓国認識、朝鮮認識が一番悪かった時期が50年代後半から60年代にかけてではなかったかと思います。「李承晩ライン」と言って、韓国政府が日本の漁船を片っ端から拿捕、中には死者まで出る事件があり、日韓関係は相当悪くなりました。元々、朝鮮に対する植民地支配、清算の意識が殆どないという状況ですので、日本人の朝鮮、韓国認識は非常に悪くなりました。日韓条約というのはそのような前提で、1965年締結されています。韓国と日本の国交の正常化が実現しています。今、日韓の間で、例えば「徴用工」の判決が出て、それに対して混乱が起きていますが、「日韓条約」が全て起源になっています。日本政府も何かというと、「請求権」問題は、既に解決済みと再三強調しています。

ここに紹介した二つの条項に問題点が完璧に示されていると思います。日韓条約は日韓基本条約と4つの付随する協定から成り立っていますが、第二条は韓国併合条約はもはや無効であると宣言しています。日本側は韓国併合条約(1910年締結)は当時の国際法に則した合法的な条約であった、と国会でも説明している。また久保田発言(53年)は、日本の植民地支配は悪いことをしたかも知れないが、韓国の近代化に貢献した。それから19世紀後半から20世紀、つまり明治維新を断行して、日清、日露戦争を引き起こす時期ですが、日本が行かなければ朝鮮半島は中国やロシアに支配されている。日本も半植

民地になる、生き残りをかける時期であって、日本のその時代の在り方は弁解の余地があるという。これは未だに相当根強い考え方です。司馬遼太郎さんの小説の世界もそのような考え方を前提にしていると言えます。戦後70年で安倍談話がありました。村山談話を基本的に継承すると言いますが、根本的に違います。日本は30年以降の中国侵略戦争については間違っただかも知れないが、植民地時代の1910年前後の時期は間違っていなかった。寧ろ、他のアジア諸国からロシアを破ったことで期待と称賛の目で見られていたというのが安倍談話の見方です。そこは未だに日本社会の中で歴史認識が一致しない。韓国では1986年の日中修好条規、そこから日本は間違っているという。色々探り、資料等を調べていくと、かなり日本人と韓国人の歴史認識のギャップは相当大きいと思います。そのギャップが前提になって、バックラッシュや反動の動きがあります。日本の在り方も含めて、分断体制を如何に克服していくのかということが韓国社会、朝鮮半島にとって大きな課題として提起されていたわけです。

韓国は分断体制を克服するため、色んな闘いをして来ました。「1987年」という映画で、日本でも上映されていますが、6月民主抗争という現憲法の制定のきっかけになった大規模な民主運動についての映画です。韓国人は半世紀以上の間、本当によく闘って来ました。最初の闘いが1960年4月の四月革命です。韓国は朝鮮戦争を通じて共産主義運動、マルクス主義運動を始め、社会運動が全滅しました。朝鮮戦争の経緯の中で、運動をリードするような人物、組織は壊滅するか或いは北に上って行ってしまっている。しかも国民の政治感覚は徹底して反共社会になっていて、全くゼロから韓国社会運動は出発しています。そういう中で最初の民主化運動の突破口を築いたのは学生達でした。60年四月革命で13年間続いたイ・スンマンの独裁政権が倒れています。しかも最初は中学生から高校生が始めて、最後に大学生が立ち上がって、政権を退陣に追い込む闘いをして来ました。60年代、日韓条約についても激しい反対運動が大学生を中心に、64年その締結を控える頃には、戒厳令が控えています。70年代に入ると金大中さんに象徴されるような民主化運動が展開される時代です。

(次号につづく)